

憧憬詩集

異国カラス

ラストノート

扉を開けばからだを包む
イミテーションの芳香
シューマンは
オルゴールアレンジされているし
音を垂れ流すのは
ピンク色の韓国製コンポだし
人形のために作られたような
小さな木目調の丸テーブルは
実際は集成板
造花の百合が白々しく
下品にそしてエロティックに
咲き誇る

母さんは丸テーブルに肘を突く
金色のウィグが
まるで生き物みたいに
耳と頬を覆い
ルージュを引いた唇と
カラーコンタクトの
ごく神秘的な空色が
僕を見上げる

軽そうな白いカップから湯気が立ち
琥珀色の水面が
小さな円の中
まっ平らに広がって
周囲のイミテーションを
ごく精密に描写する
まがいものを映す
琥珀の水鏡だけが
この部屋の本物
言いかえれば真実

母さんは僕に椅子を勧める
消しゴムみたいな質感の
白い肌が波打ち

生理食塩水でできた
乳房が揺れる
人形のために作られたような
小さな木目調の丸テーブルに
僕は足を押し込める
紅茶の湯気が
母さんの香りの中
一筋するどく立ちのぼり
香水の
トップノートの
夢を解く

母さんはささやくように語りだす
ダージリンの
香りの秘密を知ってる？
意味ありげに
小首を傾げて
微笑んで
たくさんの虫たちが
葉を何度も噛むの
それが香りを強くするのよ
僕らは紅茶を飲み交わす
琥珀色の真実を
まるで何かの
儀式でもあるかのように
言葉少なに飲み交わす

やがてカップは空になり
イミテーションの芳香が
僕を再び包み込み
残り香でまだ温かい
カップを僕は手に包む
母さんは微笑んだ
ミドルノートの中で
つけまつげを広げながら
笑った

僕は気付いてしまう
目尻の笑いじわが
消しゴム色の肌に
深々と
刻まれているのを
僕は思い知らされてしまう

僕は立ち上がる
僕は母さんから目をそらす
そしてしばし想像上の
鉄の翼のはばたきに
これから僕を
地球の裏側
その近くまで運んでくれる
巨大な機械のうなりに
想像上の耳と心を
ゆだねようとする

母さんはそんな僕を呼びとめて
足音もなくそっと寄り添い
木でも見あげるみたいに
僕の肩に両手を当てて
つま先立ちで
僕のあごに
唇を当てた
生理食塩水でできた
固い乳房が
僕のわき腹と胸に
当たった

たくさんの虫たちが
葉を何度も噛むの
それが香りを強くするのよ
母さんあなたは
その秘密を
ごく忠実に
実践してきたのでは
ありませんか？

イミテーションを
ミドルノートを
ドアの向こうに
追いやっても
はるか上空
三万フィートで
神様に会えそうな
気分になっても
母さんの残り香を
僕は
ポケットに忍ばせ続けて
しまうだろう

十九万六千八百三十三次元のモンスター

横浜の

陰で濡れそぼった坂道を

異人たちの霊がよぎっていく

カラスアゲハが

デジタル信号みたいに

羽を明滅させて

緑色のフェンスに軌跡を絡め

夕暮れを抱え込んだ崖を目指して

消える

僕は立ちすくんでいた

誰からも忘れ去られた

地下水道の多段滝が

ごく小さな気泡を巻き込みながら

闇から闇へと

流れ落ちていくのを

坂道の中央でなら

聞き取れるような気がした

ネズミの棲家ほどの

レンガ造りの

微小な水路では

きっと

音は減退することなく

永遠に反響を続けるはずだと

僕が見ていたのは

時間

異人たちの墓標が立ち並ぶ

静まりかえった路地を

桶と柄杓を手にした婦人が

顔のない後姿で降りていく

僕が見ていたのは

空間

荒れ果てた公園に安置された

呪術めいた環状列石が

みなとみらいの夜に向けて

意味ありげに頭をもたげる
僕が見ていたのは
十九万六千八百三十三次元の
回転する球体から飛び出した
モンスター
僕らの思想と文明の底に広がり
電波ネットワークのエアラインへ
仮想と抽象の袋小路へ
駆けていき
携帯のパケット伝送路で
何よりもパーフェクトに
僕らを隔離してみせた
時間と
空間を
平らげるモンスター

婦人の柄杓は
木漏れ日の下で濡れ光り
環状列石は
意味ありげに頭をもたげ
忘れ去られた地下水道は
今日もまた誰かに
忘れ去られる

夜の一片

夜の街をひとりで歩くという
気味の悪い習慣を
僕はまだ捨てることができない
側溝を這うネズミのように
夜の中で暮らしていた頃を
歩きながら思い出す
うつろな胸や
軽く運ばれる足の甲に
その頃の夜を一片
しまい込んだままにいる

いつだって夜明け前に見える
曖昧な紺色の空
青ざめた神経質な顔つき
震えて縮こまり
小鳥のように泣いている
そんな夜の一片を
うつろな胸や
軽く運ばれる足の甲に
しまい込んだまま
僕は君を探していた

君を探していた
曖昧な濃紺の空の下
夜明け前のような震えで胸を埋め
街から街へ
幻のように僕は歩いていく
日比谷 桜田門 永田町 赤坂

すれ違う人々が映画となって
僕の視界に映り込む
スクリーンの人物が
観客には影を落さないように
僕と人々は
重ならずすれ違っていく
異なる次元の上を滑りながら

僕は君を探していた

君を探していた

僕は人々の影を踏めず

人々は僕の影を踏めない

街から街へ

幻のように僕は歩いていく

四谷 神楽坂 飯田橋 九段下

自分がどこへ行こうとしているのか

僕はまだ知らない

自分の生活がいったいどこへ辿り着くのか

まるでわからない

僕は君を探していた

君を探していた

うつろな胸や

軽く運ばれる足の甲に

夜の一片をしまい込んだまま

街から街へ

幻のように僕は歩いていく

異なる次元の上を滑りながら

幻のように僕は歩いていく

道

道がみえる 重苦しい空の中央に 不意に まぶしい傷口が開くときのように 思いがけず見出される ひとすじの道がある

春 午後二時の大気の下で ひとすじの道はまっすぐに伸びる 老人がひとり 杖を突いて立ち 乾いた水田に長い影をおとす 干からびた身体を 淡い影が支えている ひとすじの道はまっすぐに伸び 地面と空との 淡い境界線 遠い山並みの 淡い影を めざしている

夏 アブラゼミの声のとばりに 黒い道が覆われている 光の斑が 水面のようにゆれる 道は 暗い洞穴の底をめざしている 夢のような色をした アオスジアゲハが一頭 さまよい出てきて 黒い道の上に軌跡を残す 思い出せそうで 思い出せない 何かの暗号のように 軌跡はゆれ動く

秋 暗がりの中で 微小な噴水のように 虫の音がいくつも立ちのぼる 明かりひとつない山の陰で 虫の音だけが道をかたどる ぬめぬめとした川の流れが 道に沿ってひかり こことは違う どこかへ誘う 川はやがて 音を立てて分かれ 家並みの作る夜闇のなかに 消えていくが 道は続く 虫の音だけが 変わらず道をかたどる

冬 乾いた枝と幹が 格子模様を描きだす その隙間に 死んだ葉のむれが 湾曲した道を掘る 風が 道の先から転がり落ちてくる 上空の白い太陽が 吹き降ろす 白い風 張り詰めた 厳格な空気に あらゆるものがひび割れ 粉を吹く 骨張った枝々が 硬直した死骸の手のように 空に指を伸ばす その 広げられた指を屋根として 道は伸びる 白い風に逆らって 湾曲した坂を 道は登る

道がみえる まどろんだ意識に差し込まれる 細い銀色の鍵のように 道はとつぜん見出される ひとすじの道は 私たちにいっさいを思い出させ そして いっさいを 忘れさせる

ツイスター

肌よりちかい場所にうずきを覚えて
見わたすかぎりは一ひりの階段
氷の中にとじこめられた
渦巻く白い光を浴びながら
音をさがそう 声をさがそう
遠いむかしの 歌をさがそう

だが 君たちはどこへ行くのか
地平線で一列の雲が沸騰し
意思のない群衆はおびえだす
君たちはどこへも行けない
円環の内部を蹴って空転し
声は弓のように絞られる
君たちはどこへも行けない
最古の海へ落ちていく声

無限の分岐が落ちていく
龍神のため息が空を割る
毛が渦巻いて逆立つと
遠い未来を思い出し
いま再び天地が交わる
雷鳴が一筋の軌跡を描き
あらゆる可能性を反故にして
未来を選ぶ 経路を選ぶ
たった一つの 歴史を選ぶ

だが あなたたちはどこへ行くのか
波がよどみのない夢を渡って
大気は無音で染めていく
あなたたちはどこへも行けない
過去と今とが描く環の中で
終わらない落下があるばかり
あなたたちはどこへも行けない
紙に描く二次元だけの永遠

複雑な回路を前にして

描き出された絵のような絵
を見つめる絵を見つめていた
夢のような夢が夢にあらわれ
そこで言葉は踊りだす
ここに地果て海終わり
人の世もまた終わりを告げる と
余った次元を言葉が埋めて
空が始まる 夢が始まる
螺旋の伸ばす 螺旋が始まる

だけど僕たちはどこへ行くのか
生成規則が輪を作り
自己証明が首を吊る
僕たちはどこへも行けない
僕たちはどこへも行かない
意味の晴れ上がりが見えた
運行する宇宙が
絶え間ない空間の振幅が
ここを支えるための
あまりに切ない無限の回転が
見えた
僕たちはどこへも行かない
遠い昔の未来を求めて

あの屋久島で
語る者について語ろう
静かな咆哮が
甘い微かな香になり
水平線も眠るころ
ブルートレインの
時計刻みの
無感動な心音も
あいまいな夢に眠るころ

陸はいまにも
動き出しそうだった
思念の運ぶ
分子の航路を飲み干せば
星々は並びを変えて
いずれ地面を割るだろう
意味の大海で群れ踊る
小さな鰭 鯨
海水に浸かっているも込み上げる
この渴きは なんだ？

ああ 僕も生まれてみたかった
雷雲の真似をして
赤土をこねあげて
形を作ってみたかった
だが 致命的な描線が
僕を記号に押しとどめるのだ
ありえたはずの
命の近似値
生に似たものとしての
A T G C

言葉だけの朝がやがては訪れ
終わらない調弦が待っている
無数の交叉
無限の試行

限りなく
生に似たものとしての
A T G C
ありえなかったはずの
意味のまぼろし

緑の記憶

ゆるやかな地面の中で 眠っていたのは
いつのことだったろう 一瞬のきらめきの
運命的な反復が 永遠をかたどるような
そんな夢を見ていたのは あれからもう
何夜も経つんだ 濃密な
灰色の空気が 緑の肌に
絹布のように巻きついて 薄い皮膚の
内側へと 酸素を溶かし込んでゆく
酩酊しそうな 甘い空気 甘い空
どこまでも 泳いでゆけそうな空

人間が 二百万年かそこらかけて
解明した 生命の歴史と真理を
僕らは 最初から知っていた
今でもまだ 夢に見るんだ
夜を越え 命を超えて
ゆるやかな地面の上で 一瞬のきらめきの
運命的な反復が 二重螺旋を描くように
この星で 初めて
陸に上がったのが 僕らの
先祖だということ ほんの数億万世代前
誰もいない地上に 僕らは這い上がった
慣れない肺呼吸 酩酊しそうな
甘い空気 甘い空
どこまでも 泳いでゆこうとした空

僕らは 空ばかり見上げ
本当は 空へ泳いでゆきたくて
海から上がったんだ 数千万年かけ
跳ねることを覚え 筋肉を鍛え
気付けば 硬く固まった地面の上において
ようやく 本来の目的を
思い出した 一瞬のきらめきの
運命的な反復が 記憶の輪郭線をなぞるように
いまこそ空に 泳いでゆこうと思う
僕らを吸い込んでいく 灰色の空

甘い空 酩酊しそうな
酸素とオゾンの香りに満ちた空

僕は跳ね上がる
重力は たちまち行き場を失い
先祖が負った 重苦しい呪縛の夢を
ひととき忘れて 途方も無く孤独な
夜の中空に立てば 一瞬のきらめきの
運命的な反復が 諸行無常を叫ぶように
光線と重力が 僕をつかみなおす
巨大な黒い 車輪が迫り
無情にも 路面の時間を
寸断していく
緑色をした 僕の肌と
数千万年の末に 獲得された緑の筋肉
酸素に酔った 鼻はそれぞれ
押しつぶされて 窒息し
内臓の細胞 一つ一つが
永遠の大地へ 刻み込まれる
それを感じる
酩酊しそうな 甘い空気 甘い空
どこまでも 泳いでゆこうとした空

エウロパの魚

光を見たことは ある？

母さんの 甘く大きな口の中で
氷の空のうめきが聞こえた
炎の城から立ち上る無数のあぶくが
うめきの空をゆっくり泳いで
やがて ささやく声のように消えた

ああ ここでは
にじむ光が空を塞いでいるのだ
俺はどこにいるのだろう
星の聞こえない 空の下 地面の上
他に 自分の居場所を語る言葉があるか
足取りが 記憶をなくしたようにおぼつかない
あるいは 記憶をなくすために 俺は
こうして 不恰好に歩いているのかもしれない

母さんは 昔のことを物語る
甘く大きな口の中で
幾万の柔らかな舌を揺さぶって
火の城をめぐる古い戦いのこと
根の国へ根ざした
もう一人の母さんのこと などを
柔らかな舌の上でまどろみながら 僕は
聞くとともにしに聞いていた

ああ 土砂降りの雨が欲しい
鈍い雷光が欲しい
だが ここにあるのは普段の雑踏
永久に続く世界を呪う
無関心で憂鬱で
飽いたうんざりした退屈した 雑踏

どんなリズムも音階も刻まない
無情の靴音 連中が刻むのは
時間だけだ ゴム底の踵のように
すり減っていく時間だけだ 俺の
すり減っていく命だけだ

だけど 僕が本当に聞いてみたかったのは
未来のことだった

未来

火の城から泳ぎゆく無数のあぶくが
氷の空にせき止められて
やがて 大きなひとつの泡となり
空を押し上げようとする その時に
一体 何が起きるのだろうか？
甘く大きな口の中で
波打つ舌に包まれて 僕は
氷の空の ひときわ大きなうめきを聞いた

ああ 車両の窓に
俺の血走った両目が映る
答えのない問い掛けに引きずられて
山手線外回りが
がむしゃらな回転を続けている
いつまでですか
いつまでですか
いつまでですか と
その答えはごく短い
沈黙
あるいは
音楽を作らない音
瞬間と瞬間の間に横たわる
無限に引き伸ばされた 俺の
瞬間の断面図

その時は
光がやってくるのよ
光？

そう

地面が割れると 火が昇ってくるように
空が砕かれたときには 光が降りてくる
光を見たことは ある？

僕は 九つの尻尾を短く振った

そうね お前はまだ

口の中から出たことはなかった

あぶくが氷の空を砕き

巨大な悲鳴が地面まで揺さぶる そのときに
光は降りてくるのよ

光ってなに？

そうね それは

音に似たもの

音楽 のようなもの

あの電話を受けるまで 俺は
自分の心に こんなはたらきがある
のを知らなかったのだ
呪われた声が地球を裏返したせいで
俺の心臓を頼りなく動かしていた
星々の歌声も
閉じた球の中で むなしく
消え入るばかりになった

母さんの口の中に

とつぜん苦味が広がった

怯えたような あるいは

脅かすような 急かすような振動を

幾万の舌がいっせいに奏で始めた

光が降りてくるのよ さあ

外に出てみなさい

母さんの唇を恐る恐る飛び越えた 僕は

初めて触れる地面が まるで犬歯のように

腹をかすめていくのを感じた

ああ もう聞こえている

氷の空の断末魔を

集まりきったあぶくたちの

勝利の雄叫びを
僕ははっきりと耳にする
そして 何よりも速く
光はやってきた
その瞬間まで
光を感じる器官が自分にあるなんて 僕は
まったく 知らなかったのだ

それは火に似ていた
熱水を浴びたときの
身体を焼かれる感覚に似ていた
それは怒った母さんの吐き出す
刺激臭にも似ていた
鋭く尖らせた無数の舌が
腹を突くのに良く似ていた
自分の叫び声を抑えることを思い出し
辺りが静かになると それは
音に似ていた
音楽 のようだった

空のすべてを見届けてから
僕は振り返り そして 母さんが
地面に根を張っているのを
見た
大きな口はもう動かず
すべての舌は張り詰め
空を指していた
甘い匂いは消えてなくなり
あらゆる筋肉は固く錆びついて
置き去りにされた古い骨格たちが
無言のまま 影だけを支えていた

音楽が聴きたかった
かつて自分を慰めたはずの
今は失われてしまった歌声に
俺は限りなくあこがれるのだ
音楽 それは
光に似ていた

太陽 のようだった